



大正二年七月廿三日印刷
 大年二年七月廿五日發行

〔定價三錢〕

長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地
 編纂發行人 安井正夫
 上水内郡岸田村字中御所八十番地
 印刷者 田中彌助
 長野市四后町乙廿一番地
 印刷所 長野新聞社活版部
 長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地
 發行所 蘆澤書店

岐蘇林友

第四十五號目次

研究 信州に於ける曲竹に就て
 通信 學校記事、寄宿舎通信
 會員消息、蘇門會創設
 附錄 修學旅行日誌

新築記念號原稿募集

來る十月下旬母校新築落成に際しては、
 本誌亦冊子を増大し斯道大家の論說を
 始め會員各位の研究調査其他を満載し
 記念號として一大光彩を添へ度候間左
 記御含みの上奮て玉稿御寄送被下度願
 上候

- 一、種類 論說、詩歌、回箴、規想其他
- 一、締切期日 九月十日
- 一、原稿紙 可成十九字詰、二十行の
 もの文字は明瞭なること

會員各位

七月 岐蘇林友編輯部

有栖川宮威仁親王殿下ノ御薨去ヲ拜聞
 シ恐懼ニ堪ヘズ茲ニ謹ミテ至哀至悼ノ
 微忱ヲ表シ奉ル

研究

信州に於ける子マガリ
 竹に就て

一、分布 安藤校長

子マガリ竹一名チマキザ、クマイザ、ト
 稱し(學名Sasa Paniculata Makino et Shiba
 此種は廣く我邦に産し殊に本州中部以
 北の深山中には長大に成長しサ、屬中の最
 優者たるものにして信州に於ては飯綱山系
 中の諸峰殊に黒姫高妻戸隠其他日本アルプ
 ス山系及毛無山系の岩菅、白根等の高山に
 分布し所謂寒帯區域五千尺以上七八千尺の

地域に生育し主として白カンバ、ソウシカ
 ンバ等の樹林中に寄生し六七月の頃小指大
 の筍を生ず北信地方の人は食料の珍品とし
 て賞味す、此葉は越後の高田節の包に供せ
 られ牧野氏が是より該竹の種類を研究せら
 れたと云ふ珍談のある竹である

二、異名及起源

信州殊に北信地方の上下水内、下高井の三
 郡にては子マガリ竹を幣軸竹又は幣竹と稱
 して居る牧野氏も未だ學名として此名を用
 ひて居らぬが地方名である之には何か起源
 あるべしと思ひ信州の舊事に就て取調べて
 見た處が彼の信州の舊記を集めたる「千曲
 の真砂」と云ふ書冊に左の記事がある
 水内郡戸隠山三社御祭は格別異なる神事故
 爰に記す寶光院七月八日中院七月十日興
 院七月十五日なり右三度ともに式同ト先
 庭中に高さ八九尺の竹束(案するに是が
 其地方に産する根曲竹ならん)を立て殿

中より山中五十三坊各々榑をかけ鉢巻してのりを出立ことごとく異様なり一時餘り立ちながら祈誓して其後各々持ちたる幣を彼の竹束の上に立て道坊の内より一人火を持ちて彼の竹束にのぼせ右の幣帛に火を点し其下にて坊三人長刀の鞘をはずし振廻し色々に使ひて各々退散すいと珍敷神事なり

三、戸隠村中社の根曲竹利用状況

戸隠村中社とは長野市を距る五里海抜七千五百五十三尺の戸隠山にあり戸隠神社を祭る小部落にて百戸に足らざる山間の農村で古來該竹材を利用するに依り生計し殆んど年内の生業となすものであるが其原料は全く長野大林区署管内の國有林内大羽場、中島、小河原、大洞澤、黒姫の諸區域約百町歩より毎年拂下を受け以て糊口をしのぐ有様なるが其生業は却て山麓の農地多き農村に比し一般家計裕なる模様である明治四十四年竹細工組合を組織し次で産業組合法により信用購買販賣組合となし相互製品の販賣に協力し益々業務の發展を期しつゝあり大林区署よりは毎年恩惠の廉價に拂下を受け伐採は八月より十一月頃迄に終り(十)

月以降は降雪の爲め外出困難の處、其他は細工に従事する用具は越後製の鉈を専ら使用し一日五六束を普通とし多く馬にて搬出す一束の本数は其竹の太さに依り異れ共小なるは八十本乃至百本大なるは五十本位なり竹細工品の種類

一、蠶籠

- ア、並十枚に付其場渡し 三十五錢—三十七錢
イ、二重二本同上 五十五錢—六十錢
ウ、三重二本同上 七十錢—一圓十錢

二、茶籠

- 一ケに付 九錢五厘

三、乾燥籠

- 竹細工製造に要する原料及工程

一、蠶籠十枚分を作るに就て二百五本内譯
フチ竹 三十本 二年生以上
ナカ竹 六十本 同
マキ竹 十五本 一年生
之に要する竹を伐出すには一人一日二百五十本一脊負を二脊負即五百本位とし之を割りて籠となすに三日間を要し三日間にて平均二十五枚を仕上す故に平均十枚に付七十五錢と見積る時は二十五枚分一圓八十七錢五厘となる
一年間三百六十日を働くとし蠶籠のみ六十人従事するものとすれば一ケ年十三万三千枚を製すると此價格九千九百七十五圓

約一万圓の収入となる
右に要する竹の總本數二百六十六万本
二、茶籠一個を製するに就て二十五本内譯

- ソコ竹 二十本 二年生以上
フチ竹 二本 同
マキ竹 二本 一年生
ソコ文字一本 二年生以上

三、乾燥籠一個を造るには三十八本内譯

ヌキ竹 十八本 二年生以上
タテ竹 十二本 同
チカラ竹 二本 同
マキ竹 三本 一年生
フキ竹 三本 二年生以上
之に要する竹を伐採するには一人一日六百本とすれば十六ヶ分となり一日四箇を作る故十六ヶには四日となる故に十六ヶ分には伐竹製作共五日となる一年三百六十日間三十人は是のみに當るとせば年額三万四千五百六十個を産し一箇平均十四錢とすれば四千八百三十八圓四十錢、是に對する風の總本數百二十九万六十本

尙此他に九ツ取又は七ツ取と稱し野菜籠を作り又はトシ小籠等日用品をも産すれども其産額三百圓位竹の使用數も約九万本位なり
然して男女老幼何れも皆手傳てなすものなれば該組合員平均一軒に付年額二百五十圓位の購買額あり之を補ふに竹製品の生産販賣額を以て差引すと云ふ
前記計算に依るも製品賣上約二万圓之に要する年伐竹消費量五百十三万三千五百本即百本一束とするも五万三千三百三十五束となる

斯くの如く當地方に於て必要なる資材も若し之を保護せざる時は便利なる部分のみ濫採し又竹を濫收するが如き恐あり又現に便利なる所には生育を絶つに至りたるを以て村民互に規約を設け昨四十五年四月三日同業者九十四名直に篠竹保護規程を實行することとし一方拂下區域に對し大林区署に寛大の處置を願ひ出で將來竹細工業加入者を増加せざることに決したりといふ
尙は参考の爲該國有林地帯の根曲發生及生長量に就て重なる用途を對照すれば左の如し

Table with columns: 國有密林地の一坪採長楢, 精捨, 用途, 大羽場, 中島, 小河原

大洞澤 二五〇 四 七〇〇 一五〇 一五〇 一五〇
黒姫 二五〇 三 七〇〇 一五〇 一五〇 一五〇
其密林内に於ては到底先方を見透し得る能はず宛かも箱根山々頂一帶の箱根竹の密生状態に同じ然して雜木漸次生育し十年以上になれば竹の繁殖力減退す
四、北信一帶の利用状況と象山先生の卓見
尙ほ此種ねまがり竹(幣軸竹)の分布及利用状況は下高井郡に於ける特産物中第一位にありと稱せられ殊に夜間瀬、平穩、穂波の三ヶ村地籍に於ける深山、無盡造と稱せらるゝ此竹類は元來森林經營上他の樹種の發育上人工造林を妨害するものなりと稱すべきも現在に於て山間労働者及び是が利用者の範圍廣く現今該地方の製品は南は四國九州北は青森地方へも搬出され山梨尾張静岡方面へも輸出せらるゝに至り信越線豊野驛の如き常に該竹の製品類を以て埋めらるゝ状況なり又同郡野澤温泉地の如きは天然の温泉を利用し根元の彎曲を直すが如き實に寒氣強き北信の天地又竹に天與の恵あり加ふるに又之を利用するの便多きものあり之に従事するものは大抵日當四十錢以上六十錢位の儲となり農村の生活資料として經濟價值の大なる到底他野生植物の及ぶ所でない

彼の勤王愛國の志士信州の偉人佐久間象山先生の當時藩老小山田臺岐に當てたる答野

(松代領)地方に於ける興利去弊意見書中左の一節あり曰く
山中へい竹多く候この竹火繩に殊によろしく候
と嗚呼天下の先覺者と稱せらるゝ象山先生も時代の推移は未だ現代の如きへい竹利用の状況に達せんとは尙想だもせざりしならん然し當時火繩に用ふる事を授けられたるは流石に開國進取の先覺者の策として敬服に價す彼の九州地方にてはチンタク(トウチウ)を火繩に利用せるが信州に於ては當時北信の深山野生のへい竹(根曲竹)利用に注意せられし先生の炯眼驚くに餘あり然れども先生をして現代北信の財源となり農村の糊口之に依りて保つもの多し年額十餘圓の特産品として殊に養蠶國の蠶具として其消費の多大なる事を知らしめたならば如何に文明の惠澤利用の進歩を察せらるゝであらうかと思ふ唯此に吾々は數十年前人の未だ知らざるに先んて澤山の竹利用につき意見書を提出せられた佐久間先生の功績に對し特に附記して長野縣の竹類利用状況の過去を偲び現在を記し尙收來の竹林状態に希望を寄する所以である(同記事は農業世界七月號に長野縣下の竹林利用状況と題せるものゝ内の一部なり)

彼の勤王愛國の志士信州の偉人佐久間象山先生の當時藩老小山田臺岐に當てたる答野

通信

學校記事

森林視察旅行 六月廿六日第三年生一同は伐木事業其他森林視察の爲、安藤校長北村教諭嶋内教諭川崎助手付添ひ小川王瀧方面へ出張二泊の上廿八日午後歸校せり。講堂訓話 六月卅日午後零時半より生徒風紀上の事に關し校長より訓話あり校長は先づ新入生に對し入學後既に七十餘日を経過せる今日、諸子は果して入學當初の希望に反することなく學術の研究心身の修養に就て遺憾なきや否やを問ひ更に上級生に對しては數多の新入生を迎へ之が先輩者として模範を垂れ之を誘掖輔導する上に就て遺漏なかりしや否やと問ひ世間の風評と忠告を參考として風紀上一層注意すべき諸點を指摘し生徒各自の猛省を促し更に矯風の責ある級長室長等の此點に關して一層改善に努力せられん事を希望され餘談として此度校長自身視察せられたる瀬戸川伐木所に於ける卒業生の状況就中第三回卒業生岡田彌兵衛氏の忠實勤儉にして飽くまで努力主義なるを稱揚され卒業生の好模範として推稱し大に一同を感奮興起せしむる處有たり。象山先生記念講演 七月十一日は幕末の偉人象山佐久間先生の五十年忌に相當するを以て午前八時より講堂に於て記念講話を行へり正面には先生が餘年二十以徒則知匹

夫有繫乎一國。三十以後則知有繫乎天下。四十以後則知有繫乎五世界。と云へる自贊の語を記せる肖像を掲げ側面には望岳賦の一幅を掛けたり校長先づ肖像に向て一拜し一同次ぎて敬禮を行ひ夫と講壇に移れるが第一席に校長は先生の年譜によりて略傳を述べられ次に先生の所謂興利即ち殖産興業に對する意見及實績に付て詳述せられ又先生の學制に對する意見に付ては重要な項目に付き一々説明し今日の學則或は生徒心得なるものと對照述べたる所ありて壇を降り次で第二席として新築教諭壇、開國論者としての先生の生涯即ち先生が開國論を唱ふるに至りし経路其變遷及其運動に就て説述し餘談として先生の逸事二三を語られ降壇す時に午前十一時なりき蓋し象山先生の如きは實に信州の偉人なるのみならず實に天下の英傑なりかるが故に今秋九月松代及京都に於ける先生五十年記念祭は規模を大にし之を國家的に行はんとて夫々準備中なりと聞く是れ寧ろ當然の事と云ふべし而して信州人以外に各縣下の生徒を網羅せる我が校が其忌日に當りて當時を追憶し先生の雄偉卓抜なりし識見と度量とを偲び併せて開國維新の一大恩人として景慕感謝の情を寄するは大に意味の深長なるを覺えずんばあらず。哀悼の日 有栖川宮威仁親王殿下には豫て御静養中の處御病勢草まらせ給ひ十日午後八時二十分御薨去の趣其筋より傳達ありしを以て一同哀悼の意を表し謹慎靜肅を守れるが十七日御葬儀當日は授業を休止し更に哀切痛悼の微衷を表し奉れり。新嶋林學博士來校 東北農科大學教授にして森林昆虫學の泰斗なる新嶋博士は農科大學林學科學生八名を率ゐて修學旅行の爲に入蘇せるが十二日かくと聞き安藤校長は鹽尻驛まで出迎へ折柄驛を距る一里許筑摩地村落葉松林に於ける害虫の視察を乞ひ引き返して數原に一泊し翌十四日は木曾支廳を訪問され午前十一時松田技師と共に來校せり校長は學生の爲に長野縣下に於ける林業の一斑に就て約三十分許説明の勞を取られ新嶋博士の質問に答へ正午圖書室に於て晝飯を供し食後校長の案内にて標本室等縦覽せり午後一時より講堂に於て博士の講話あり約一時間に渉れるが要旨は大体を知れ觀察を精細にせよと云ふにあり前者の例としては獨逸學生の克く遊び克く學ぶ面白き實話を試み後者の例としては博士得意の昆虫談を提唱し精詳なる説明を加へられ誠に有益なる演説なりき(詳細の記事は追而本誌上に掲載すべし)。中村縣屬視察 中村縣屬は十四日午前來校、校舎、寄宿舎等の設備を視察せられたり。夏期實習其他 夏季實習豫定左の通り。自七月廿一日 農林實習。自八月十日 登山修學旅行。自八月十一日 登山修學旅行。自八月十三日 登山修學旅行。

實習慰勞休暇

自八月十四日 實習慰勞休暇。自八月廿四日 實習慰勞休暇。自八月廿五日 學科授業。右期間中は實習及學科を問はず午前七時始業十一時修業の半日課業とし雨天に當れる實習は大雨の外休業とし(室内實習の時は此限にあらず)尚ほ實習の際は扇柏笠及蓑蓑を使用するも差支なき事とせり。右は十九日發表せるが之が爲め今日第四時校長は生徒を講堂に集め學則改革後最初の夏季を迎ふるに當り心得べき要項を訓示し特に攝生に努め自ら奮つて暑熱を征服し中道挫折するが如き事なからん事を戒められ次で實習主任北村教諭より更に勇氣と誠實とを以て従事すべきを申せられ尚ほ實習方法に付て二三注意する所ありたり。

寄宿舎便り

山青く水澄める我が木曾の谷も昨今の暑さナカク、侮られず相成候。随つて蚤軍の襲撃夜毎に猛烈にして白シャツも爲めに血痕點々として飛白模様を染め出し申候。又例年の如く脚氣患者が新舊兩寄宿舎に多少發生仕り候は誠に残念なる次第にて候。目下工事中の新築寄宿舎は數日以前に舎監室事務室等の一棟建てられ候へ其他の一棟が宿舎は尙未だ礎も碌々据わらぬ有様に是等全部の完成には尙少ならず日子を要す可く見受けられ候。

會員消息

圖書室は去る三月第十回卒業の諸君より各一部宛御寄贈を忝ふし以來現在舎生の有志者よりも數部寄贈有之且つ新に購入せる品も亦少なからず爲めに近來面目を更め申候。從來雇入れ居りし炊夫川上氏は今回都合により六月限り解雇仕り同時に老婆志村氏を雇入れ申候。現在舊舎生五十七名新舎生四十八名此中病氣の爲兩三名は外泊致居候早く新舎の完成を得て合併し一大家族の樂園を形成し度もにて候餘は次第にて可申上候勿々。江畑前會長より來翰、かねて江畑前會長の功勞に酬ゆる爲廣く會員諸彦の寄附を募り居りし處六月上旬を以て漸く完結せるを以て別項報告の通り金時計及附屬品取揃へ購入寄附者芳名簿を添へ六月十五日先生の許に郵送せるが越えて二十三日校友會宛左の謝状を寄せられたり。深縁ノ初會員各位彌々御勇健御精勵一段邦家ノ爲慶賀不堪候。生依然奮進ヲ墨守シ鍛練怠ラザル積ニ候。願ミルニ齡而立テヲ蘇校ニ承ク世故ニ通ゼス機微ヲ解セズ折衷讓歩ハ事ヲ就スノ金誠トハ信ズルモ公私ニ拘ラズ徒ニ何等ノ修飾ナク舌鋒鋭ク對手ノ急所ヲ衝キ追求スル等修練ノ不用意ナリシ爲メ百日ノ經營慘膽モ一朝ニシテ畫餅ニ歸シ却テ累

フ四邊ニ波及セシメタルコト蓋シ渺ナカラザリキ、退イテ深ク思フ回ラシ足ラザルヲ補ヒ錯レテ正シ最善ノ誠ヲ致スニ努メ候ヒキ、サレバ在職中ハ諸先生ノ同情アル協力ト而シテ有識者ノ援助トニヨリ漸クニシテ光輝アル歴史ノ後ヲ繼承シタルニ過ギザルトキ同時ニ會員諸君ヲ教化シタリト謂ハシヨリ寧ロ大ニ諸君ニヨリ激勵セラレタルヲ窃ニ信居候、然ルヲ過分ノ恩賞ニ浴ス一喜一憂交々至リ感謝ノ意ヲ表スルノ辭無之候、生今ヤ教界ヲ辭シテ再ビ俗吏ト脱化ス感興異様ナル者有之由來御役所ナル者ハ表面規矩準繩理ニ盡セルガ如キモ裏面ニ於ケル彼等活動場面ハ更ニ大ナル者アリ假裝假面ヲ以テシ綺辭麗句ヲ駢列シ漂々乎トシ顛ヲ扶ケ危ヲ保チ患難ヲ防ギ自他ヲ冷融スルニ鞠躬盡力シ又他ヲ顧ミルニ暇ナシ此渦中ニアリテ生齡將ニ不惑希望ヲ抱イテ獲ズ理想ヲ趁フテ捉ヘズ安慰ナク祝福ナシ然レドモ不斷ノ琢磨ト勇猛ノ工作トハ必ズヤ多少ノ成功ヲ齎シ得ベシトノ信念ノ下ニ相携ヘテ斯界ノ爲メ將又母校ノ爲メ向上ノ一路ヲ辿ルアルノミ茲ニ各位ノ御芳志ヲ深ク銘スルト同時ニ切ニ御自愛ヲ祈上候早々敬具。大正二年六月二十三日。江畑 猷之允。校友會各位。池井深一君 同君は今回狩戸と改姓の由

來信あり
喜多村明君は今回森林主事に任せられ大
阪大林區署在勤を命せられたり
原田義治君は東京大林區署へ轉勤、神田
區鎌倉河岸青雲館止宿
松原三郎、木下稗藏兩君は豫報の通りシ
ンガポールに向け出發せるが六月二十三日
長途無事同所着陸の旨通信あり遙かに兩君
の健在を祈る兩君の住所左の如し
Navy Hotel No 5-16F17
Beach Road Singapore

蘇門會創設に就て

我創設よりして茲に十餘年、卒業生三百
名に垂んとす、其初めに於ては後進
を知らず、後進者は先輩の姓名を知るに止
まる者尠しとせず、其生國に南北東西の別
はあり、其在學の時異り、其就職の方面
場所相違はありと雖も、同じく林業界に
志を有し、同一の學校に學びたる同志の間
に一種云ふ可からざる親和力あるは我等の
經驗に於て事實なるを知れり。
協同一致の力は個人の力の合計に非ず、實
に三百人の協同一致は一大勢力なり、而し
て將來年々加ふる卒業生の數は益々多數な
らむとするに當り、今蘇門會を確立して一
層其親和を善良ならしめ相率ひて進まんこ
とは吾等の爲めにも、母校發達の爲めにも、
好結果たるや必せり。
既に長野市、甲府市及び福嶋町に於て形式

に差ありと雖も、同志の一團を作り又は時
々會合を催しつゝあり、此際全部を通じて
一團とし來る母校新築落成式參列の爲め多
數會員の參集するを機として發會式を擧ぐ
るは誠に時機を得たるものならむ、依つて
茲に蘇門會規約の原案を提出して諸君の贊
成を仰ぎ併せて高見の存する所を聞かむと
欲す。
極めて自由に、各個人の意志を束縛せざる
間に於て目的を達せしむ事を主眼としたるを
以て會長も定めず規約も細部に涉らず一に
運用の自在ならむ事を期したり。事業等に
就ての抱負は諸君に於ても多々ある可く、
吾々に於ても尠しとせず、要は機に應じて
之を實現すれば足る、徒らに名目を列擧し
て實之れに添はざるが如きは吾等の採らざ
る所なり。
(御意見の存する所は御遠慮なく川崎宛に
て御通達下され度候)

發起者

- 宮下 信一
川崎 本雄
蘇門會規約
第一、本會は蘇門會と稱し事務所を木曾山
林學校内に置く
第二、木曾山林學校卒業生は本會員たる者
とす
第三、本會の目的は會員相互の親和を計り
且母校との連繫を良好ならしむるにあり
第四、本會は其本部を母校所在地に置く、

會員は本部に通知することにより各地
に支部を設けることを得
第五、本會の目的を達する爲め本部に於て
年一回以上適當なる時期に總會を開催
す
第六、本會ノ事務を處理する爲め本部に幹
事三名を置く
第七、會費は總會の都度實費を徴收す
第八、本部よりの通報等は總て岐蘇林友に
依る

雜報

江畑先生へ記念品贈呈寄附金收支決算
收入ノ部
一全百拾九圓六拾錢 總收入高
內譯 百七圓 卒業生寄附高
拾貳圓六拾錢 在校生寄附高
(但シ第七回卒業生一同現三年生、二
年生一同及一年生四名分)
支出ノ部
一金百拾九圓六拾錢 總支出高
內譯 七拾七圓
十八形十八金時計壹個
四拾一圓五拾錢 拾八金鎖壹本
壹圓拾錢 雜費
雜誌費領收報告
金參拾六錢 吉澤英雄君、金五拾錢 村松
一清君
小松先生へ寄贈金領收報告(第四回)
金壹圓宛 蜂須賀宮次郎君、小池金三郎君

金五拾錢宛 村松一清君、倉澤健雄君、小
羽根安治君
小計參圓五拾錢
累計拾九圓六拾錢
高木先生へ寄贈金領收報告(第二回)
金五拾錢宛 成瀬義郎君、倉澤健雄君、宮
澤嘉一君、小羽根安治君
金參拾錢宛 大久保五成君、吉澤英雄君
小計貳圓六拾錢
累計七圓九拾錢

金壹圓 溫井誠一殿
金貳圓 下畑德十殿
金貳圓 宮澤嘉一殿
金貳圓 市川潔殿
金貳圓 神作四郎殿
金貳圓 新井喜多雄殿
金貳圓 小林恭一殿
金貳圓 木村音次郎殿
金貳圓 水野忠一殿
金貳圓 小松吉次郎殿
金貳圓 家高甚一殿
金貳圓 長谷川義雄殿
金貳圓 遠山一郎殿
金貳圓 大島角藏殿
金貳圓 金田美行殿
金貳圓 由尾忠助殿
金貳圓 高柴真次郎殿
金貳圓 中嶋要人殿
金貳圓 小池新伍殿
金貳圓 宮崎次朗殿
金貳圓 岡戸廣治殿
金貳圓 原四郎殿
金貳圓 松澤萬吉殿
金貳圓 肥田幸一殿
金貳圓 坪倉藤三郎殿
金貳圓 川崎本雄殿
金貳圓 松本清太殿
金貳圓 樋口久次郎殿
金壹圓 征矢朴郎殿
金壹圓 成瀬義郎殿

野村光智殿
大谷卓松殿
少計九拾六圓
累計百七拾圓五拾錢
第二學年修學旅行日誌(第二回)
五月十七日 土曜日 晴天
(自日光至東京)(農科大學視察)
午前五時半神山旅館と永き別れを惜しみつ
つ停車場へと向ふ途中の並木「一足百圓」に
はさすが驚いた。六時上野行きに乗車して
帝都に向つて日光に永のお暇をした。今朝
出る時はどんよりとして居た空も晴れて所
謂天氣晴朗滿天拭ふが如しと云ふ様になつ
た並木は最早盡きたが頭には徳川時代の狀
况を私語してゐる並木を離れては林らしき
所もなく所々杉及檜並扁柏の純林やら混
交林やら時々見受けられ赤松は何處でもだ
車中を夢の世界として藤村操を泣かせし雀
宮、宇都宮もいつしか過ぎて眺むれば茫々
たる關東平野實に氣持がよい大宮、浦和等
の驛も東の間に上野の呼聲を聞いた時は正
に十一時十五分、足を神田小柳町廣島屋に
止むる事にして荷物を預けて農科大學に向
ふすが帝都だ汽車あり人力車あり電車あり
自轉車あり尻を放る自働車あり電車あり
立派な風をした似非紳士も居つた先づ萬世
橋より汽車にて大學に着いたのは零時三十
分であつたさすが大學だ關門より教室に通
する道約四丁程は名も知らむ樹木が鬱葱と

- (一) 木織製造器
 - (二) テレピン油及コック製造器
 - (三) 木材乾溜装置 (イクストナル氏式) (口横電式)
 - (四) 木錯液蒸溜器
 - (五) アセトン製造装置
 - (六) 樟腦製造装置 (レーキ装置)
 - (七) 以上にて製したるもの
- 是等に付き精しく説明を承る。次に木材陳列所に案内さる
- (一) 本多先生の始めて造られたる日本森林帯 (長サ二間半)
 - (二) 木材伐採器及標本木材 (押壓器加工木材標本、經本標本等)
 - (三) 種子標本室 (内國産、外國産)
 - (四) 製圖室 (用具及製圖)
- 是等に付き簡単に説明を給はり后苗圃に案内さる
- 一、見本林 (外國種、内國種)
 - 二、森林帶樹種區別植栽
 - 三、床替及播種 (外國種、内國種)
- 以上にて視察終り午后三時より農業温室に案内さる是にて農科大學視察も了つた時將に四時に垂としてゐた大學の關門をくぐりしは四時過ぎ此處に自由解散して各々心の向ふ所に從ひ歸途に着いた
- 五月十八日、東京市内見物 (省略)
五月十九日、月曜日、晴天

(東京滞在)

午前八時高世橋より電車にて目黒林業試験場に向ふ目黒驛下車約十丁にして在原郡目黒村大字下目黒なる山林局林業試験場に達す正門より左關に至るなら坂の兩側にヒマラヤ杉、ヒバ松等の風致樹其他ヤダケ、メダケ、タイムミンチク、カンザン竹ナリヒラ竹、シカク竹、キッコウ竹、モウソウ竹、等あり某場員の案内により木工所を見る本所は次の如く分る

- (一) 膠工部——山林局林業試験場なる宮城縣玉造郡温泉村鍛冶屋澤木工所にて丸太を角又は板にせしものを此所にて乾燥し且加工する所にて林はブナ及ナラを主とす即此所にて大なる乾燥器により乾燥し之れを張るのである而木を張る利益は一重量を減すること二木狂を防ぐ事である
- (二) 組立部——鍛冶屋澤木工所にて大体造り上げしものを此所にて組立つるのである
- (二) 塗工部——組立てしものに「ニス」又は漆を塗る所である、

此所を見て次に標本室に入る館内は造林及森林植物室狩獵及森林動物室、木材及林業用具室、加工林産物室、清國林産物及製品室、模型及び圖簿室等に分れ、玩具、盆、コルク細工、椅子樂器、旗竿の如き木製品から清國の車、寝台、靴或は木織維を以て製したる人造絹糸ネクタイ、帽子、秋田矢立林の模型世界各國森林寫真外國製器具等一として吾等を益せざるものはない次に森林

化學室に至り化學實驗室を觀、樺油製造所に至る即樺油は白樺の皮を鐵鍋に入れて乾燥製成するものにして之れは獸皮に塗布して黴を防ぎ保存を長からしむる効ある由此所を見終つて種子鑑定室に至る此所には發芽試驗器種子標本室あり各細微なる試驗をされて居る温室に至りては熱帶植物を見苗圃に至り各種の試験を視る第一に施肥試驗 (化學的肥料、植物質動物質) 發芽促進試驗昆虫經過試驗移植試驗移植省畧試驗挿木試験接木試験尙ほ播種期及び播種方法に關する研究としては

- (一) 苗木床替の深淺と根組織との關係
- (二) 杉の開花原因及豫防法
- (三) 日本産とうひ屬並にひば杉の變性研究
- (四) 苗木成長の刺激濟 (ナフタリン、マンガニン)
- (五) 苗木に對する石灰苦土の比率。等造林に關する調査及試験としては
- 一、枝打の程度と林木の直徑高並材積成長
- 二、林木植栽距離試驗
- 三、下草刈拂と幼年木成長との關係
- 四、かし類の造林法
- 五、ひば、もみ、つが、ひのき、赤松等の天然更新法等にして見本林に至りては「にせあかしあ、かし、にせあかしあの接木等殊に目についた次に孟宗竹栽培方法比較試験の説明をきく而此の栽培方法に京都市及目黒式あり

京都市。牽々露出するを放置し埋没するこ

となく冬に於て馬糞堆肥を地上約五等位の高さに覆ひ九月頃に於て水糞尿を少量施す方法なり

目黒式。六月頃に於て地上の根の表れたるとき三尺位地面を掘り下げ根を埋没し九月頃に於て水糞尿少量を施す方法である

チヌーロッパラタンズ並木を經試驗場を辭す直に目黒不動に參拜し又電車にて今度は飯田町に下車して東京砲兵工廠を視察す全所は水戸公の宅地にして一万二千餘年あり工場は銃身工場修理工場、銃床工場、組立工場、輪削工場、鐵工場、砲具製造所木造工場等にてその規模の大なる分業的なる實に感嘆せざるを得ない工場の視察終りて後樂園を見る之れは水戸の後樂園に擬したるものにして中に白雲台、木曾山、寢覺の瀧得仁堂、萱門莫門、田植の池などあり樹木は鬱蒼として繁り紅塵万丈の東京に於て殆んど山中に入りし感がある (未完)

第二學年修學旅行日誌 (第二回)

五月十八日 日曜 晴 第五日

自大瀧 至下市

涼々たる水聲に醒むれば四山蒼々として清涼の氣四邊に滿つ朝陽既に東嶺を出でし午前六時半起床、吉野の碧水を掬して顔洗ひ口漱ぐ吉野川には鮎多く其の名も優しき櫻鮎となむ呼ぶ、朝食后七時三十分宿舎を發し直ちに土倉庄三郎氏宅に到り前日の謝禮旁々暇乞をなす同家の庭前にて吉野特有の

技打梯子及技打鉈を見るやがて同家の御子息の案内にて吉野山行林道に入る傾斜優にして疲勞なし大瀧の里を顧みれば既に數町の脚下にあり此の山間を飾るもの僅に萬緑叢中紅一點とも謂つべき椿の點在せるのみ愈々進めば山愈々深し一行の談笑木魂に響きて物凄し前後左右皆これ杉林扁柏林何處迄も果てしなくまたまた展望するを得ば森は漠々として雲に連るが如し道の屈曲變化によりて毫も歩行の倦怠を覺わす

風雪の害保護のため鐵線もて立木を引き起し且其の樹幹にあたる部分には樹皮を別に當て棕櫚製の繩もて鐵線連結せざるあり森林撫育の懇切なる流石に吉野なり吉野林業の集約的なる天下に名をなす所以一瞥して歴然たり

途中杉林に入りて案内の方より間伐に就きて實地に説明ありたり北村先生も亦自身林中に入りて間伐木指定の練習を行はれたり此處より少時に於て愛染峠の頂に達し一休す、流る、汗を拭ひつゝ心地よき風に吹かれて天氣更に加はる此の頂上にて案内者に別る右方に義經蹴坂の塔あり此の邊より吉野山の名所舊蹟歴々として指呼すべし歩一歩吉野山に入る聞きしにまさる廣大なる山なり全山花雲の棚曳くには非ずして葉櫻一帶緑氈の如し二月月運きを憾む芭蕉翁をして「これはく」驚愕せしめ八田知紀翁に「見ゆる限り」と詠唱せしめたる花時の盛觀濃艶なる色彩を想像して止まず先づ奥の千

本に入る西行庵近しと雖も行くに暇なし西行通世の頃には人籟遙かの地たりしならむも今は三四の茶店ありやがて金峯神社に到るこゝにて午後二時迄に吉野停車場に集合すべしとして一行解散各員自由視察とす時に午前九時半次第に坂路を下りて佐藤忠信の故事ある花矢倉を過ぎ捷徑をとりて如意輪寺に向ふ道程意外に遠しやがて寺に達し小楠公の蹟を吊ひ近傍なる後醍醐天皇塔尾の御陵に參拜すそゝる當年を想起し一掬の涙無き能はず辨の内侍の碑も近かりき此の邊り一帶を中の千本とす道を本道に返して勝手神社を拜し南朝の皇居たりし吉水神社 (吉水院) に到る後醍醐天皇及び補正成を祀る後醍醐天皇當山に遷幸遊ばされし時以來長く吉野朝の行宮となし給へりと云ふ往年の玉座御墨簾等其豊公の寄贈物等拜觀を許さる當時の御有様を偲ぶる再び道を返して藏王堂に到る堂は金峰山寺の本堂にして山内第一の巨刹十八間面あり其の丈六の仁王は運慶堪慶の作なりと傳ふ仁王門の大なる銅華表の大なる皆相應はし元弘の昔大塔の宮吉野御籠城の折本陣となし給ひし處其の最後の御酒宴を張り給ひしは庭前櫻樹の邊りなりと村上義光の忠死せる地に近かるべしと思ふ堂後の銅華表より左すれば吉野皇居金輪寺あり一行は三々五々相前後して下千本を過ぎて下山す隠れ松一目十本歌塚を過ぎ村上義光の墓に詣つ義光は信濃の人なり檜茂れる小阜の上にあり明治四

てはトロ一臺で十尺内外を積む事が出来ず軌道の工事全部の連絡は昨年までに完成せしめられたから本年よりは軌道運搬をするのであります...

五寸には十五尺とし三間以上は七尺の倍數となつ居ります金松も同様であります...

等材十二三圓極下等にては二三圓なりと署長の懇切なる説明に依りて高野森林の概念を知ることを得たり...

十一年大演習の折贈從三位を給ひしと、更に下りて官弊大社吉野之宮に参拜す本殿には後醍醐天皇を齋祀り左右に攝社として南朝忠臣七士を祀る...

し時價に見積り約卅三圓なりと聞きて其の收利の大なるに驚く尙此の竹林の肥料としては油粕堆肥畜土を施用すと説明ありたり...

午後六時半より先に視察せる農林學校林科生約三十名來宿茶菓を供し一同互に膝を交へて一見舊知の如く學校相互の状況より實習其の他吉野林業に關し會談する事約一時...

五月十九日 月曜 晴 第六日 自下市町 至高野山 午前四時の起床とは辛らかりき朝食を終へて直ちに旅装を整へ下市驛に急行す...

高野山に向ふ。數丁を出でずして紀の川を渡り九度山なる大阪大林區高野小林區署に到る茶の糞應を受く高野の森林てふ冊子を各自一冊づゝ贈與せらる。署長より別項の如く高野山の森林に就て説明せられたり...

費(附近の山にて)五十五錢なりと云ふより山に從ふて第三十六林班伐木地に着す署員に付て例の如く説明を受く偶々數本の伐倒ありて實地説明も明に了解するを得たり此處を辭して刈萱堂の附近に出づ高野は山頂の台地に所謂九百九十ヶ寺を配し堂塔參差たり、左右見る所多きも素通りにて金剛峯寺に着しぬ流石に眞言宗の大本山規模の宏壯なるに幽寂なるに驚けり大學校中學校不動堂御影堂西塔御社孔雀堂六角輪堂金堂大門等を拜して宿所に向ふ小坂坊持明院に投宿す空腹甚だしく直に食事數腕を傾けぬ。夜は大學校より擊劍の稽古を申込まれ一行中より三名之に應じ他は參觀に行けり三氏共大學校及中學校の撰手と妙技を盡くして戦ひ大に一行の面目を保せられたり。就床十時半俗界を去ること遠く海を登ること三千尺人籟絶てて靜かなる夜は更けぬ。

五月二十日 火曜 雨

自高野山 至和歌の浦

蕭條たる春雨高野山頂の萬象をたゞいて降る數日來眺めたる新緑の景は高野には見るを得ず唯こゝかしこの寺坊の後園は點見せるのみ古りし寺の古りし松柏の林濡れて益々黒し余等一行の始めて遭遇せし雨なり昨年我校旅行團のこゝに雨に合ひしとかやよくよく高野の下山には雨に縁ある哉七時半宿所持明院出發雨に泥濘の道を双鞋に踏みしめて下る困難名狀すべからず友田技手

前日の如く先登にあり大門に到り八峯を顧みれども霧深く摸糊として辨すべからずこゝより坂路に出づ道と釣籠にて登る人あり下る人あり我等は砂走りの勢にて進み下山隊を抜くこと數行やがて林道に出づ上野てふ處のインクラインに達すことは軌道運搬の切落しとも稱すべき處にして鐵鏈の長さ一七〇尺のもの二條ありトロー一台の上昇下降ともに六分時を要すと折しも雨の緩射急射益々加はる一行駄洒落れて曰く「大師何の爲にかくも我を苦しましむ」と「云ふ勿れ天の重任をこの人に下さんとする孟子の言を唱へよ」と時正に八時半高野に發到車十時二十五分迄約一時間半あるのみ道程三里尋常一様の速力にては間に合はざるや知るべきなり議遂に駛走と一決し各人輕裝雨を犯して走り出でたり一行の意氣益々軒昂盛雨と汗とに外と内より濡るゝもいとほいで一目散不動坂も知らざる間に過ぎぬかゝるをこそ意駄天とも云ふべきなり頭上を亘る鐵索運搬の呻りも最早聞へずなりて平坦なる道に出づこゝより尙も一里なりと勇を鼓して或は走せ或は歩みぬ草鞋破るれども替ふる暇なく徒跣の者も少からざりき一行相前後して九度山を過ぎし頃は余すところ僅かに二十分かくなりては足は無意識的に動き素足毫も苦痛を感せざるに至り遂に先登は發車前十分殿は二分前着驛し先日預けし荷物を受取り停車場に入る旅行中かばかり強行せしことは前にも後にもなかりし事

なりき幸にも列車約十分間延着の爲め一行の息をつぎラム子或はサイダーに渴を醫し元氣恢復の餘裕を得たりき十時三十五分發車々中下山の功名失敗得意各々談笑に花を咲かす汽車は紀の川に沿ふて駛る紀伊は南國暖き國也路傍に蜜柑島多し折しも雨上りて心地よし窓外の山容水態雨色に滿ち活躍せり零時五分和歌山市着下車して同市公園及和歌山城天守閣物産陳列所等を視察す此の市に約一時間半余の視察を恣にするを得たるは先きの強行の賜なり二時集合電車にて和歌の浦に向ふ三時和歌の浦に着望海樓に投宿す一行は二見を去りて再び海に接しなる事とて直に海濱に歩を移しぬ磯に碎けて打ち返す波波路の末に浮きたつ雲何物か造化の神の妙手に濡れむ近き船は行けども遠き帆影は動かむともせず紀三井寺あたり夕日に映ひてさながら油繪の如し日漸く西方の山に没せんとする頃宿舎に歸れり沖に出で、遊びし者も二三ありし夜は九時半迄外出海濱の夜風を吸ひつゝ眠れば波聲濤聲夢ととも香かなり。(未完)

